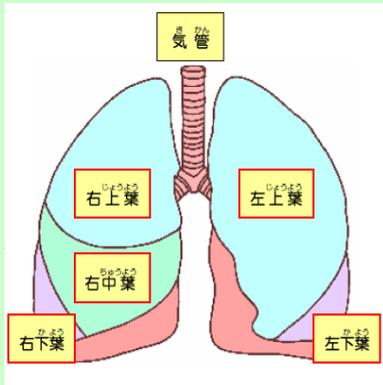


肺がん



松阪市マスコットキャラクター
「ちやちやも」

<病気について>



作成：医事課

肺がんとは、**気管支**から**肺**に発生する**悪性腫瘍**（がん）の総称です。もともとは、正常な細胞が何らかの原因によりがん細胞に変化します。がん細胞は増加するにつれて、血液やリンパ液の中を流れていき、発生部位の周囲の臓器だけではなく、遠くの臓器にまで広がります（**転移**）。肺癌発症の原因には、**喫煙**（受動喫煙を含む）や**石綿**（アスベスト）など、これらを長期間吸い込むことが肺がんの発症リスクを高める要因の一つであると、一般的には考えられています。

<症状>

初期症状としては、以下のような症状があります。

持続する咳や痰 **血痰**（血液まじりの痰） **胸部痛** **発熱** **呼吸困難** **体重減少**

※これは一例です。他の症状が出現する場合や、肺がん以外の疾患でもこれらの症状が出現する場合があります。

肺がんはあまり症状が出ないため、早期発見が難しい疾患です。このため、定期的な健診を受けていただくことが大切です。また、持続する咳や痰、微熱など気になる症状があれば早期の医療機関受診をおすすめします。

<検査>

胸部レントゲン検査

肺の異常や、疑わしい部分の発見に適していますが確定診断まではたどり着けません。小さな病変は発見しにくいです。

胸部 CT 検査

がんの部位や形、大きさ、進行度、転移の有無等の発見に有効ですが、確定診断まではたどり着けません。

胸部 MRI 検査

がんの**胸壁**や**縦隔**への広がりを検討するのに行われる場合があります。

頭部 MRI 検査

がんの脳への転移の有無がわかります。

PET 検査

特殊な検査薬を注射しPETで撮影すると、がんの有無や位置、転移した部位がわかります。

血液検査（腫瘍マーカー）

血液中のある種のたんぱく質のレベルをみることにより、進行がんの存在の判断材料となります。

気管支鏡検査

喉に麻酔をし、気管支鏡（内視鏡）を口から挿入し、喉から気管支、そして肺を観察します。同時に、痰や組織を採取し顕微鏡でより詳しく分析（**病理検査**）します。

はりせいけん きょうくうせんし 針生検・胸腔穿刺

きょくしょますいご
局所麻酔後、体外から針を胸部に挿入し細胞や組織を採取します。採取した組織や細胞等を顕微鏡でより詳しく分析（びょうりけんさ）します。

びょうりけんさ 病理検査

検査で採取した組織や手術で切除した組織を、顕微鏡等でより詳しく分析します。がんや転移の有無、がんの進行度合いの診断（どあ しんだん）がなされ、追加手術（ついか しゅじゅつ）の必要性や化学療法（かがく りょうほう）を行うか等の判断基準（はんだんきじゆん）ともなります。

いでんし けんさ 遺伝子検査

近年、特定の遺伝子（ひしょうさいぼうはい）に変異のある非小細胞肺癌（ぶんしひょうてきやくざい）に対して、効果的な薬剤（ぶんしひょうてきやくざい）が登場しました。この為、特定の遺伝子の変異があるかどうかを調べます。

<治療>

肺がんの種類や部位、がんの進行度合いにより異なります。
手術（外科的治療）

基本的に手術の適応は非小細胞肺癌（ひしょうさいぼうはい）となります。手術室で全身麻酔下にて行われます。

かんぜんきょうくうきょうかしくじゅつ 完全胸腔鏡下手術

早期肺癌に対しては胸腔鏡（内視鏡）を用いて 3cm 程度の小開胸創（しょうかいきょうそう）で、モニターを見ながら手術を行い、腫瘍を含めた肺を切除およびリンパ節の郭清（かくせい）（※1）を行います。

きょうくうきょうほしよかしゅじゅつ 胸腔鏡補助下手術

進行がんに対しては、胸腔鏡（内視鏡）を補助的に用いて、8cm程度の小開胸創（しょうかいきょうそう）で手術を行い、腫瘍を含めた肺を切除およびリンパ節の郭清（かくせい）（※1）を行います。

部位や進行度合い、大きさによって部分的に切除する場合、肺葉を切除する場合、肺を全て切除する場合があります。

※1 リンパ節郭清（せつかくせい）・・・リンパ節を周囲の脂肪組織と共に切除します。

化学療法

いわゆる抗がん剤による治療です。抗がん剤は血液によって全身へ運ばれるため、広い範囲のがん細胞にも効果が期待できます。

静脈から点滴を行うものと、口から薬を投与する場合がありますが、がんの種類や進行度、患者様の全身状態を考慮して治療方法を決めます。また、入院して投与治療する場合と通院で投与治療する場合があります。副作用にも注意が必要です。

ほうしゃせんりょうほう 放射線療法

がんとその周辺のみを治療する局所治療です。がんを完全に治すことを目的に行う場合とがんによる症状緩和や延命を目的として行う場合があります。また、化学療法（かがく りょうほう）と併用（へいよう）することもあります。副作用（ふくさよう）にも注意（ちゅうい）が必要です。

<平成 28 年度当院データ>

・肺癌で入院した患者数 882 人

※パンフレットに関するご不明な点等ございましたら、医事課まで御連絡お願い致します。